

歌集「遠山脈」

昭和九年（一九三三）三月、広島高等師範学校文科第一部（国・漢）を卒業した瀬群敦（号統三）先生は、卒業後ただちに新潟県立三条中学校（現三条高校）に赴任された。先生は大正二年（一九一三）十二月、大分県中津市角木町に生まれ、大分県立中津中学校を卒業された大分県人であるが、特に囑望されて新潟県に奉職されたのである。

因みに、高師時代の同級生に、現安田女子大学教授森田武先生、広島修道大学教授古浦一郎先生、四天王寺女子大学教授松末三男先生がいられる。また、瀬群先生と同時に高等師範を卒業し、同じ三条中学に英語教師として赴任された方が、菅原久夫氏である。氏は県立新潟高校長を最後に高校教育からひかれ、現在新潟大学講師で、尚志会新潟支部長である。菅原氏はこの歌集を手にして、同窓、同僚としての瀬群先生の面影を、ひとしお懐しく追慕されたことであった。

また、歌集刊行直後、編者の野地潤家先生が新潟大学に公用で御出張になった。その

折、瀬群先生の三条中学時代の教え子二人が、野地先生を出張先に訪れた。二人とも瀬群先生の追憶を語りつつ、涙を禁じ得ないのであった。一人は、歌集の中に「欣也に」として十一首の歌を贈られている現新潟日報社取締役長岡支社長中島欣也氏、もう一人は新潟市の不動産実業家宮島氏である。宮島氏は、瀬群先生から先生の高師時代の国文学受講のノートをもって今でも大切に保存している。

このようなことを書いたのは、四十年前も前の「知り人」の追憶の中に、今もありありと生きているという事実、瀬群先生のお人柄がしのばれるからである。現にこの歌集を編んだのは、瀬群先生が三条での七年間の生活に別れを告げて、昭和十六年四月に広島高師附属中学に赴任された時の教育実習生野地潤家先生と、附中の教え子石田民生氏である。教育者としての瀬群先生の偉大さは、三十二年・四十年の歳月を超えて生きつづけ、その高雅清純の歌ごころは、この歌集によって再

び花開いたのである。

昭和十年（一九三五）歌誌「言霊」の創刊から同一九年（一九四四）の同誌八五号までに発表された八五七首を収めてあるが、そのうち前年六年間は三条時代であるから、ほぼ九割の七六〇首ほどは、三条中学や雪国の風土に関する歌である。

生徒に対する歌には、しみじみと愛情がこもっている。

をのこなればひた泣くなかれ積雪の下にも
春の草は萌えずや

本にさす日をさへぎらず生徒達今朝の青空
をたのしみてをり

右の歌は、新潟の風土を背景にしつつ生徒を歌っている。

この表に泣く子あらんか雪融けの外との面もの
春を雀等鳴けど

こういう気持ちで成績通知表を渡す教師は多くはないのではないか。

学校にて不運なりしがなさぬ仲の母により
そひ鼻するこの子

言ひとき事何かあるにか我が後を追ひ来る
けはひ背にいちじるし

三十一字の表現の中に、生活の複雑な物語

がこもっているような歌柄である。

冬まさに定りて降る雪の日を十日は病まず

生徒は死にゆけり

みまかりし子を思へば大河のみなざらひ

行く水とどまらず

腹割かれし苦患のあとをとどめずて汝が死

に顔のよきが切なき

生徒の死に対する慟哭がひきしまった表現の

裏にほとばしっている。

前に記した中島欣也少年が航空士官学校に

入った時の歌はさわやかな緊張に満ちてい

る。

上つ毛の夏野すがしき青嵐なが天翔るとき

は来向ふ

眉秀でし汝がおもかけに飛行帽よそはせて

おもふ別れ住みつつ

戦時下の師弟愛の典型的な表現 とは、こう

いう歌を言うのであろう。

教師としての自己を深く見つめる歌が多

い。

本をひらかず寝る時となりて今日も思ふ我

に退化のはじまりしこと

ひつつきと言へばさびしけれども珠算の加算

になれてはば間違はず

身にあまる雑務を持ちてつかれをる教師と

いふはしがなきものか

我と我が議論に酔ひてうそ寒き藤椅子に身

のふるへを覚ゆ

すばらしき研究題目など見つけいきほひて

物読みし日もしばしはありき

温情の名にかくれとる事勿れ主義教師ゆづ

りて事をはりたり

無能なる教師の如く言はれるて教学刷新の

お談義長し

教育的天才にあらねばいさぎよく理想主義

など投げ去るべきか

学窓にありて描きし理想など失ひて日々は

踰眼と来ぬ

あたらしき明日を思へど朝来れば出勤簿に

判を捺すばかりなり

箇の癡愚に足りし一生ひとよのはるけさや俗執の

身をはこび来ひけり

(良寛に)

教師生活の自省の中に、何か生活の空虚感

や哀感がただよう歌である。それは、歌の中

にもはつきり歌われているように、研究への

憧れと教育上の理想主義が、思うようになら

ない状況につきささって、きしみの音を立て

ていると理解される。学問と教育への憧れが

強く、教師の理想を抱くがゆえに、魂の苦

悩が先生の心を重くしているのである。

越の国新編県の風土・風景を歌う歌には、

描写のリアリティと実感の力強さがあふれて

いる。

粉雪衝きて馬糞走ればあさの街をはたらき

に出る我もいさみぬ

雪消えていまだ日もあらぬ川土堤に露の臺

掘ると子は群れてをり

こゝにしてただに打見る守門山よはねの雪は

目にすがし

佐渡島山雲のはしりにうすれつつ流人の愁

今あらたにす

雪来ぬと人はさげびぬ一夜よさにとほ山の背に

雪かがやけり

歌柄が大きいというべきか、越後の風土の

特色を一首の中に包みこむような歌の数々で

ある。

玲瓏と雪の山脈あらはれぬ高志国原こしに春の

空晴る

いたゞきは秋はやくして金色の大气にゆる

く蜻蛉あそぶも

前にのべた空虚感を満たしてくれるもの

は、先生にとって自然の大きさ・美しさであ

ったようである。右の歌には、はればれとし

た心の喜びがこもっている。

おちぶれし冬の思ひは峰とほくさすらひ行きて雪のまぶしき

塵勞の身をいとむと山川の清きに下りていきづく我は

この歌集の題となった次の歌は、先生の生活と心情とつたところを、みごとに表している。

なみよろふ遠山脈に及ぶ日や我にかへりて腰あげにけり

先生は山の大きさと壯嚴を愛する人であった。自然に対して心で向かいあった人である。

家庭詠には、先生の心やさしさが光っている。

ふるさとを離れてとほし窓によりて我がかへり来るを母待ちるなり

たらちねの命たたとひたすらにをさなごに似て歎けり我は

妻を歌う歌として、次のように美しくすがすがしい歌は多くはあるまい。

をとめ一人わが妻となす宵の灯の明るき中に入りて坐りぬ

たまきはる命の張りにふれ来つつ君契る酒冬の夜を牙ゆ

いちはやき背戸の川辺の白梅のすがしきも

のを君に求めむ

ははそはの母が朝眼にかしづきてものいよ聞けば妻が愛しき

厨着の白きを着るとわが新婦さやさと朝は音のかるけき

春鳥の椋鳥なけりすがやかに朝眠ひらきてわが妻も聞け

その奥様は、先生の故郷に御健在である。瀬群統三先生の歌について、もっと多く

を語らなければ、そのすべてをおおうことはできない。それほどにも先生の歌の世界は広く深いのである。ここにその一端にふれたに

すぎないのであるが、先生の歌の一々を読み進むにつれて、誠実で高雅な魂にふれる感動

にひたされて行ったのである。原爆に散った先生の生涯を惜しむとともに、私たち後学・

後輩の者にとって、先生は教師として人間をして、一つの鑑であるということをしみじみ

とさとしたのである。

(昭和54・3・1、溪水社刊、B6判、二七八ページ。二〇〇〇円) (浮橋康彦)